成田 ゆかりの人々

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第30回 甲田健之助（こうたけんのすけ）

文久3年～昭和22年（1863～1947）

埴生郡西吉倉村に生まれる。農業を営む傍ら、植物・昆虫などの研究を行い「素人の百姓博士」と呼ばれた。著書には今沢慈海との共著『蘭恵弁妄（らんけいべんもう）』がある。また、水野葉舟とも親交が深かった。

農業を極めるために

甲田健之助は文久3（1863）年、埴生郡西吉倉村（現在の吉倉）に、父勘兵衛、母はるの長男として生まれた。一家は農業を営んで生計を立てていたため、健之助も小学校を卒業するとすぐに家業を手伝うようになった。

17歳の時、世界的な農学者と言われるヘンリー・ストーンの著書『斯道（しどう）』から、農業に携わる者はそれに関わる全てのことを熟知しておく必要があるということを学んだ。以来、農業を極めるために、農作業を行う傍らで植物や昆虫を採集し、調査・研究を行うようになった。何事にも熱心に取り組む健之助は英語やフランス語を独学で勉強し、外国の植物についての知識も習得した。

人々のために尽力

健之助は、貧しい農村の現状を改善したいという思いから、米の収穫量を増やすため品種改良の研究に取り組むようになった。そして明治35（1902）年に「利根」「八千代」といった成育の良い米の開発に成功。その知識と功績から健之助は「素人の百姓博士」として、朝日新聞社発行の雑誌『アサヒグラフ』や報知新聞で紹介された。

その後も農業の合間を見ては、痩せた土地でも育つ作物を調査したり、薬草の効能を調べたりするなど、人々の暮らしを豊かにするための研究を続けた。

健之助の功績が刻まれた石碑（場所：成田山公園内）

昭和9（1934）年、東北の飢饉（ききん）を救うために、成田中学校（現在の成田高校）校長の今沢慈海（じかい）（広報なりた平成31年1月15日号）と共に、成田図書館（現在の成田山仏教図書館）で、健之助の植物標本の展示会を開催した。

慈海との縁がきっかけとなり、成田山新勝寺開基1,000年を記念して成田山公園内に新設される薬草園の造成に携わることとなった。造成は「日本の植物学の父」といわれる牧野富太郎を顧問として行われ、健之助は入手困難な薬草の収集に奔走するなど多忙な毎日を送った。

昭和12年、薬草園の管理をしていた健之助は、詩の勉強会の講師として新勝寺を訪れていた作家の水野葉舟（ようしゅう）（広報なりた平成30年11月15日号）に出会った。健之助は、植物研究を行っていた葉舟と親交を持つようになり、たびたび自宅に招かれた。また、葉舟が主宰する「下総郷土談話会」にも参加し、同会の若者たちに経験から得た知識を惜しむことなく伝えた。その人柄に大きな影響を受けた葉舟は、著書『鄰人（りんじん）』の中で、健之助のことを書いた「オレフの樹」という作品を残している。

昭和22年、多くの人から親しまれた健之助は85歳でその生涯を閉じた。成田山公園には、健之助の多大な功績が刻まれた石碑が建てられている。

編集後記

6・7ページに掲載している「広報なりたで振り返る2019年の主な出来事」。私が一番印象に残っているのは女子レスリングワールドカップです。スポーツ観戦が大好きな私は、今回は取材の担当ではなかったので、観客として楽しみました。世界のトップ選手の試合を間近で観ることができて大興奮でした。22ページでは来年に市体育館で行われる大相撲の巡業についても掲載しています。皆さんもこの機会に、生でしか味わえない空気を肌で感じてみませんか。

令和元年12月15日号　No.1401

成田市のホームページ
https://www.city.narita.chiba.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD（ユニバーサルデザイン）フォントを使用しています。

令和元年12月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地　電話0476-22-1111（大代表）